

読書通信



No. 103

① 東洋経済新報社百周年のときのロゴは「百年リベラル」だった。リベラルという言葉は葉は誤用、悪用、借用、さまざまに使われる。で、「伝統・文化など価値観の共有を重んじる保守(共和党)、個人の自由を重んじるリベラル(民主党)」(毎日新聞)などというステレオタイプの記事が書かれたりする。保守とリベラルを対立概念としてとらえるから、記事脇の図では横軸の右端の保守には自民、真ん中に民主、生活、みんな、左端のリベラルに社共、などという笑うに笑えぬ配置が堂々と

描かれていた(志位さんもびつくりだろう)。中島岳志『リベラル保守』宣言(新潮社1470円)は自由民主主義、漸進主義、寛容性、歴史と伝統重視等々の中に良質な保守主義は成立し、リベラルとの統合が可能になることをトクヴィル、バーク、チェスタトンなどの言説とともに論じていて、二項対立的に保守、リベラルを考えることの不毛を鋭く追及している。貧困問題とコミュニケーション、ナショナリズムへの言及や橋下批判も興味深い。

② 靖国について考えることが多かった8月、保阪正康『靖国』という悩み(中公文庫、880円)を再読した。「法的には日米戦争が継続している状況下に行われた東京裁判のA級戦犯は戦闘中に敵に殺されたのと同じな威力」などといった身近なテーマを論じていて、前著同様、非言語コミュニケーションを考えるうえで大いに参考になる。さてどこから改善しようかと思う人もいるだろう。

③ 7年前の夏に出版されていまだに人気の高い百田尚樹『永遠の0』(太田出版、1680円)講談社文庫、920円)の文庫版が300万部に達し、映画化も進んでいる。零戦のパイロットたちを中心にした物語だが、先の大戦の史実を忠実に追いつながら、戦争と家族愛が織り成す感動的な(安易に使いたくない言葉だが)小説に仕上がっている。戦争、とりわけ特攻の悲惨さを描きながら、ミステリー仕立てで最後まで引きつける。構成のうまさはこちらが処女作とは思えないほどだ。(純)

④ 第一印象によって就職も結婚も商談も決定的に影響を受けるのに、人は意外に無頓着だ。『人は見た目が九割』は大ベストセラーになったが、読まない人は容姿こそすべてと思っただけではないか。第二弾、竹内一郎『やっぱり見た目が九割』(新潮新書、735円)は「コミュニケーションは受け身から始まる」「オーラはいかに生まれるか」「目と声の